福知山における外国人のための防災対策
ー「やさしい日本語」についてー

Easy Japanese Language –In the case of emergency for foreign persons in Fukuchiyama

桃井　恵一

要旨

東日本大震災から１年半余りを経て、当時の記録が少しずつ明らかになってきた。「やさしい日本語」とは、災害時において日本語を母語としない人々を対象に、語彙の言い換え、文型の簡略化などの表現で表されるものであり、日本語教育に関わるものからピクトグラフにいたるまで様々な状況において考慮されるべき視点であり、1995年の阪神淡路大震災をきっかけに広く考えられてきたものである。今回の研究ノートでは、福知山という町における発生時の避難指示に関する表現や、地域在住の外国人への配慮について、行政や地元メディアがどのような備えをしているのかといった実態を調査、把握し、災害時のおける日本語表現などについて、今後のあるべき姿を考えていくものである。

キーワード: 災害、やさしい日本語、地方行政、コミュニティFM、情報伝達

Keywords: disaster, Easy Japanese, local administration, means of communication

1．はじめに

本稿で扱う「やさしい日本語」とは、災害等発生時に、日本語を母語としない人々を対象に、語彙の言い換え、文型の簡略化などを通して、情報の発信、伝達を容易にする取り組みである。地域における日本語を母語としない人々が災害発生時に、いかにしたら伝達情報を入手しやすくなるか、考えていく。災害時の情報伝達手段には、町中にある広域避難指示の案内(看板)や、行政・地元メディアなどによる無線放送などが含まれる。それらが実際にどのような備えであるのかといった実態を調査、把握し、災害時のおける日本語表現などについて考えていく必要がある。日本学術会議が社団法人日本語教育学会に対し、「東日本大震災への学術としての対応」とし、「日本語を母語としない『情報弱者』に対する情報発信と受信の実態調査」、「『情報弱者』への情報格差の改善・是正」などを審議項目として要請してきたと

いう事実からも、自然災害時における情報伝達手段は、大変重要な事項だと言える。福知山市は、由良川と土師川の合流地点に位置し、これまでたびたび水害に見舞われてきた歴史がある。堤防建設がさかんであり、国内では他に類を見ない堤防神社があるのもその現れと言えよう。昭和28(1953)年や平成16(2004)年の水害では、多くの被害を出し、市民の間では、後世に歴史を伝えていく取り組みがなされている。例えば、市内各所に水位到達線の掲示を見ることができる。このような環境のもと、災害発生時の情報の伝達手段について、検証をし、不備があれば改善点を提言していくことこそ、地元に根ざした教育機関としての責任であると考えている。

2. 先行研究

2.1「やさしい日本語」とは

弘前大学の佐藤和之教授によると、「やさしい日本語」とは、「普通の日本語よりも簡単で、外国人もわかりやすい日本語のことです」。(注1)

このような定義の引用をしたのは、「やさしい日本語」は、守備範囲の広い概念だからである。庵(2008)によると、これまでの「やさしい日本語」を、1.簡約日本語、2.災害時の外国人用日本語、3.フォリナー・トークと3つに分類している。いずれも、語彙、発音、文型などを考慮に入れ、学習者に分かりやすいことを目的とした「やさしくした」日本語であるが、本稿では、上記の分類の2.災害時の外国人用日本語を中心に考えていきたい。

2.2「災害時の言語表現を考える」(佐藤 2004)

災害に遭う外国人は、そのうえ必要な情報を得ることが困難な状況におかれる。いわゆる「情報弱者」である。「情報弱者」について、佐藤は、単に外国人だけを想定しているのではなく、視聴覚障害者、高齢者も災害発生時に適切な行動をとれるような伝達の表現を視野に研究をしてきている。また、地域との連携、この中には行政機関、コミュニティFM、NPO法人なども広く巻き込み、多角的な支援を考えている。その中で、やさしい日本語化への手順として、1.情報のどの部分を伝えるか吟味する、2.日本語能力三級・四級の語彙を用いる、3.その語が使えるかどうかを確認する、としている。

2.3 「やさしい日本語の試み」(柴田 2006)

柴田(2006)による「やさしい日本語」とは、佐藤(2004)で指摘されている「やさしい日本語」と同一のものと考えても差し支えないであろう。柴田(2006)では、佐藤(2004)を元にして、語彙、情報内容、文章構成、音声による伝え方を中心に考察されたものである。語彙とは、日本語能力試験3級程度、小学生の低学年程度で理解できる単語レベルを差し、情報内容とは、頭の中で翻訳すればすぐ行

動に移せる文章構成を指す。また、文章構成については、必須情報、選択情報、安心情報、利得情報を整理し、必要な単語、文を適切に繰り返すことによって、理解しやすくなると指摘している。最後の音声については、1.ことばのかたまりを作って、読み上げる、2.イントネーションは普通の話し方と同じパターンにする、3.速度は通常の話しことばより遅くする、4.難しいと思われることばは解説を付ける、としている。

3. 福知山における対応策

3.1 行政機関（福知山市役所・危機管理室）

現在、福知山市の人口は、80.913人(2010年度)、そのうち外国人登録人口は937人(2010年度)となっている(注2)。内訳は、以下の表1の通りである(順番は注2の統計に従う)。これらの外国人登録者に対し、福知山市としての取り組みを尋ねたところ、「やさしい日本語による防災」と、市内49カ所にある「広域避難所」の案内(看板)があり現在日本語と英語のみで掲出している。また、災害発生時の基礎知識としての「やさしい日本語による防災」の取り組みとは、すなわち「外国人のための防災ガイドブック」を五カ国語(英語版・中国語版・韓国朝鮮語版・スペイン語版・ポルトガル語)とやさしい日本語版を準備している、とのことである。これらのガイドブックは、財団法人 京都府国際センターによって作成されたもので、地震について、大雨と台風について、非常時の災害用伝言ダイヤルや、非常持出品、避難場所などについて書かれているものである。絵を豊富に使い、大変分かりやすい印象である。また、その他、外国人の団体組織、国際交流ネットワーク会議(まちづくり推進課)とも連携しているとのこと。さらに、情報伝達手段として、防災無線を利用し市民に呼びかけると同時に、日本語によるメール配信を行っているとのことだ。

表1　福知山市における外国人登録人口(2011年度)

	人数
韓国・朝鮮	381人
中国	185人
ブラジル	65人
フィリピン	222人
アメリカ	12人
その他	72人

3.2 コミュニティFM（福知山FM放送・FM丹波）

災害発生時に、テレビ、ラジオ等のマス･メディアの役割はとても大きい。地域に密着したコミュニティFMであれば、その情報内容の密度が濃くなることは当然であり、重要性は更に増すことになる。福知山にある福知山FM放送（以下「FM丹波」とする）はその貴重な役割を果たしている。特に、地元の地名等固有名詞は、言い間違えなどをしない自信があり、災害情報で、国道○○号線△△

地区付近といわれたら正確な地名に置き換えることができると自負している。FM 丹波では、2008年に福知山市と「災害時における緊急放送に関する協定」を締結し、2009 年より、京都府下のコミュニティ FM で初の「自動緊急割込装置の運用」を開始している(注 3)。この協定によると、災害とは「地震、台風、大雨、大雪、大規模火災、武力攻撃事態、その他の非常事態」が想定されている。では、ひとたび災害が起きた場合にどのような体制を取るのであろうか？FM 丹波の事業所に尋ねてみたところ、福知山市災害対策本部、及び中丹土木事務所より FAX が来るので、それを元に FM で情報を伝達していくということだった。また、広域避難指示は市役所から、注意報・警報に関しては情報サイトから情報を得て、その上で放送するとのこと。福知山市の防災行政無線を、有人もしくは自動で割り込み放送を切り替える装置を運用しているという。これらは、FM 放送と、同時に、同一内容となるため、情報がより的確に拡散し伝達できるものである。そして、防災行政無線には、３種類の音があることが今回初めてわかった(表 2)。

果たして、日本語学習者、いや、日本語母語話者でも「避難勧告」と「避難指示」とでは、どちらが強制力を持っているのか、知っている人はどれだけいようか？

表２ 防災行政無線におけるサイレンの種類

	送出音	伝達内容
パターン１	ウー・ウー・ウー	避難準備情報
パターン２	ウ――・ウ――	避難勧告
パターン３	ウ――――――――	避難指示

避難準備情報は、「事態の推移によっては避難勧告や避難指示を行うことが予想されるため、避難のための準備を呼びかけるもの」、避難勧告は、「居住者の立ち退きを促すもの（避難を強制するものではありません)」、避難指示は、「被害の危険が切迫したときに発せられるもので『勧告』より拘束力が強くなりますが、指示に従わなかった方に対して、直接強制までは行われません」（いずれも篠山市のホームページより）というが、どの場合も法的拘束力は有しない。事態の重大さを順番にすると、

(1) 避難準備情報＜避難勧告＜避難指示

となる。

4. 現状から言えること

4.1 福知山における「やさしい日本語」への取り組み

現状では、災害発生時における、いわゆる情報弱者への対応について、改善の余地は残されていると言える。例えば、福知山市危機管理室が備えている「外国人のための防災ガイドブック」は、大変有益な情報源だと言える一方、内容が京都府汎用であるが、例えば福知山市（及びその周辺）に特化した地形図、断層、及び広域避難マップを記した「ハザードマップ」と組み合わせたものを準備することにより、より身近な視点で捉えることが可能になると思う。地名の中には、表記と通常の読み方との間で解離があるものがある。地元の人には分かる、という立場ではなく、分からない人にも理解

できることを考えるべきである。漢字表記に加えてローマ字表記をすることにより、発音と文字がつながり、その結果、ラジオ、災害無線を含め音声で地名を拾い出すことが可能になる。ラジオに関して、FM丹波の取り組みはかなり進んでいるという印象である。例えば、FM丹波のホームページから、iPhone、iPad、スマートフォン用のアプリをダウンロードすることができる。このことで、携帯端末や情報端末からラジオを聞くことができる。それと同時に、twitter と連動させることが可能であり、その結果、音声と文字の双方から視聴者(また、閲覧者でもある)に、即時情報を提供することができる。音声と文字による情報伝達はことに災害時には効果的な情報伝達が可能だといえる。

4.2 大学等の教育機関の役割

次に、地域に根ざした教育機関の役割は、という問いかけに対し、教育機関である以上、果たすべき役割がある。最新の研究成果や潮流を地域の市民に還元し、日頃より防災意識の中に、情報弱者の方々への配慮、効果的な情報伝達手段を考える機会を提供すること、また、例えば「避難勧告」「避難指示」といった、日頃何気なく接している言葉で、実態がよく分からない事例を提示し、防災活動に役立てて頂くように啓発することが求められる。過去、地域貢献の一環として、「外国人のための日本語講座」について、受講生を募ったが、希望数に達せず、不開講となったことがある。その際は「日常生活に役に立つ」日本語という視点から実践会話をする計画であったが、当時、需要は多くなかった。今日、状況は変わり、「やさしい日本語」による地域の市民同士の連携が必要になってきたといえるのではないか。地域の外国人及び地域の日本語ボランティアに共同参画をお願いし、そのコーディネート役として、大学が機能すれば、地域の連携は可能であると思う。外国人の立場、地域住民の立場、それぞれの立場から、「やさしい日本語」を通して交流できる場を提供し、日本語を通じ、相手への配慮を考える機会を提供することこそ、教育機関の役割であると考えている。

5. 今後の課題

市役所ー行政機関として、幅広い広報手段を有している。また、災害発生時には、災害対策本部が設置される機関である。行政に対し、今後出てくる課題を提供し、可能であれば、改善策を具申するようにしていきたい。具体的な課題については、「外国人のための防災ガイドブック」の「福知山版」の作成についてである。これらについて、例えばNPO法人である国際交流団体や、地域の大学が連携をし、福知山に特化した情報（地名・広域避難所など）を盛り込んだものを作成していくことが考えられる。

FMー地域に根ざした地元ならではの話題を提供しているコミュニティFM局である。災害時の緊急放送については、地域からも期待されている。しいて述べれば、「災害時にはコミュニティ FM」といった広報活動があれば、災害発生時に、ラジオ、情報端末、インターネットなどで市民が耳を傾けることになると思う。加えて、情報端末がさらに普及すれば、音声情報に加えて文字情報が付加されるサービスを受ける手段が格段に高くなる。位置情報、固有名詞を含め、情報がより正確に伝わる

ことになる。このことは、外国人に限らず、市民だれに対しても極めて有効な手段である。

また、広報活動については、地域の教育機関である大学などと連携し、地域の学生を巻き込むこと、教育機関等のイベント時に広報をし、例えば公開放送を通じ、より多くの市民とふれ合うことでさらに認知度、信頼度を上げることが可能になると思われる。また、そのような役割を期待されるものこそ、コミュニティFMであると言えるのではなかろうか。

大学ー地域に根ざした大学を標榜しているため、責任と役割は大きいものと考えられる。そして、可能な範囲でできる活動を展開していけるようにいくつかの提言を列挙してみた。

(1)やさしい日本語講座

大学における公開講座として、外国人を対象とした、やさしい日本語（と同時に分かりにくい日本語も学ぶことで、それぞれの日本語の橋渡しができると考えているが）を講義し、日本語に親しんでもらうようにすることができると思う。また、同時に地域の日本人の市民にも参加して頂くことで、やさしい日本語への言い換え方法、どの程度の語彙なら理解されやすいかということも講義することで、理解を深めることが可能になると思われる。

(2) 福知山方言の標準日本語の接点

福知山地方にも独特の言い回しがある。福知山に長く住んでいる外国人には難しくないかもしれないが、まだ来たばかりのひとに人には、難しい言い回しが出てくることもある。災害等緊急時に、少しでも聞き取れない語句があると、ストレスになる。そこで、分かる範囲で事前に、当地独特の言い回しなどをマニュアル等にまとめ、なじんでもらうことも考えるべきである。

また、以上の結果などを踏まえて、「外国人のための防災ガイドブック」の「福知山版」へと反映させることも重要な課題だと思われる。福知山方言は丹波方言に含まれる。具体的な特徴については、「丹波方言」(注4)に説明を譲ることにする。

(3) ピクトグラムの作成・広報活動などの手伝い

説明するよりも、見てすぐに分かる「絵」を提示することは、情報伝達に大変有効な手段であることはいうまでもない。大学等に在籍する学生で絵心ある人を中心に、「絵を描く」ことで地域貢献ができるのではないかと思われる。

6. まとめ～「易しい日本語」から「優しい日本語」へ

以上述べてきた通り、災害発生のような緊急時に用いられる「やさしい日本語」とは、使ってみると難しくない言葉であるにもかかわらず、常日頃意識し、よりやさしい語彙に言い換える習慣を身につけていないと難しい。「やさしい日本語」とは、日本語を母語としない外国人学習者だけではなく、情報弱者と言われる一般市民に対しても極めて有効な言い換え、表示である。その意味で「易しい日本語」は、地域の住民の「優しさ」が表れる表現である。本稿では、現時点での災害発生時の情報伝達体制等の進捗を見てきたが、「今後の課題」で挙げられている問題点の中には、未解決、未着手のものもある。それらの課題については、次に提案するつもりである。

≪参考文献≫(50音順)

(1) 庵　功雄(2008) 「『やさしい日本語』をめぐって」<多文化共生社会における日本語教育研究会 第4回研究会(一橋大学 2008.7.27)>より

(2) 岡崎　眸(2008) 「日本語ボランティア活動を通じた民主主義の活性化ー外国人と日本人双方の『自己実現』にむけてー」『日本語教育』第138号

(3) 佐藤　和之(2004)「災害時の言語表現を考える-やさしい日本語・言語研究者たちの災害研究-」『日本語学』23-8, pp.34-45)

(4) 柴田　実(2006)「やさしい日本語の試み」『放送研究と調査』(FEBRUARY)

(5) 柴田　実(2007)「災害時に使うための日本語音声」『疱瘡研究と調査』(AUGUST)

(6) 弘前大学人文学部社会言語学研究室(2010)『「やさしい日本語」作成のためのガイドライン』

≪注≫

(1) 弘前大佐藤教授のHP http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/EJ1a.htm より(2012.10.20現在)

(2) 「福知山市統計書」(平成23年度版)より

(3) 「災害時の放送」(福知山FM放送) http://fukuchiyama.fm-tanba.jp/bousai.html より(2012.10.20現在)

(4) 「丹波方言」wikipediaより http://ja.wikipedia.org/wiki/丹波方言 より一部改編 (2012.10.20現在)

主に兵庫丹波から奥丹波にかけて、「連用形＋て（や)」で尊敬を表す「テヤ敬語」が使われる。(中略)過去形は「-ちゃった」、地域によっては「-たった」となり、これの類推から現在形も「-ちゃ」となる地域がある。進行・継続は「-とって（や)」であり（「-ちゃって（や)」とも)、京都の「-てはる」に対応する。